朝日新聞 第3種郵便物認可

支え合い 将来に備え

大震災1週間 帰宅難民助けた体験生かす

東日本大震災から18日で1週間が経過した。発生当時、交通網がマヒした都心では、町内会や小学校、商店が帰宅困難者に手をさしのべる光景が各地で見られた。この体験を踏まえ、近い将来に起こりうるという東京直下型地震に備えて動き出した人たちもいる。

資材庫、校内に移す

校内に新設する「震災用資材室」で話し合う町内会と小学校の関係者、左隅が林校長、中央が久保田さん＝足立区千住の千寿本町小学校

大震災では都内も震度5強の揺れに見舞われる中、足立区千住の町会は900人の帰宅難民を受け入れた。

千住3丁目町会の久保田修平さん(60)は地震の直後、「何か手伝うことはないですか」と近所の千寿本町小学校に顔を出した。

林正樹校長(63)は、区役所から避難所開設の指示を受けた。「毛布と水とクラッカーを運んで欲しい」。頼まれた久保田さんは、若手の教員らと、1キロ先の資材庫までリヤカーで走った。

1～5丁目町会の青年部の仲間ら10人が駆けつけ、車4台のピストン輸送で300人分を運んだが、帰宅困難者は増えるばかり。同校から歩いて5分の北千住駅は、千葉・埼玉県の郊外へ向かう常磐線や東武線のターミナル。電車は止まっていたが、都心から歩いて来る人が最大で3万人に膨らんだ。

本町小では会議室や教室をすべて開放。未明には、在校児童約500人の校舎に集まった避難者は900人を超え、廊下まであふれた。約30人の職員と町会の人たちがほぼ徹夜で対応した。

これまで年に一度の訓練はやってきたが、「本番」は教職員にも町会のメンバーにも初めてだった。

久保田さんは仲間を呼び集めようとしたが、携帯電話は通じなかった。もっと強い地震だったら倒壊家屋や渋滞がひどく、今回のようにはいかない。校長と話し合い、震災用の資材庫を校内に移すことにした。

東京を含む南関東は今後30年以内に震度6弱以上の地震があるとされる。「今度は帰宅者だけだったが、地元の避難者が加わったらどうなるか」。久保田さんと林校長らは、考えをめぐらせている。

(菅沼栄一郎)

リハビリや妊娠中の人「素晴らしい対応」感謝

コーヒーやベッド提供

日本橋のパン店や品川駅ビル

中央区のコレド日本橋・地下1階のパン店「メゾンカイザー」は翌朝まで閉店時間を延長し、パンやコーヒーを無料で提供した。両ひざに人工関節を入れる手術を昨年受け、リハビリを続けている村松圭子さん(76)＝写真、杉並区宮前＝は12日未明に地下鉄の運行が再開するまで約10時間、店に避難。「素晴らしい対応だった」と感謝している。

村松さんは近くで展覧会を見た後で地震に遭い、ビル内に避難。同店のカフェで料理やパンを注文して過ごすうち、帰宅できない人が集まりだした。店員が椅子を追加したが満席になり、店外の廊下に座りこむ人も増えた。

店に居合わせた木村純一郎社長が自ら店内外の避難者にパンを焼くよう店員に指示、毛布も貸し出したという。

村松さんは「地下鉄が動き始めたとき、拍手が沸き上がり、みんな社長と握手して別れた」と話す。

◇

「流産もせずに無事帰宅できた。感謝の気持ちでいっぱいです」。大田区在住の喜多亜紀さん(31)は、JR品川駅近くのショッピングプラザ「ウイング高輪」の従業員らに助けられた。同駅で実家に戻る母を見送った直後に地震に遭った。双子を妊娠して5カ月。おなかは大きく膨らみ、長女(2)のベビーカーを押していた。

タクシーの列に並んだが、順番は回ってこない。あきらめて歩き始めたものの、おなかが張って立っていられなくなった。トイレを借りようとウイング高輪にくると、従業員が椅子を用意してくれた。

閉店時間を迎え、健康な人は近くの避難所の地図が配られて外に誘導されたが、喜多さんはエアコンの利いた部屋に案内され、簡易ベッドで横になった。「自力で歩けない私たちやけがをした赤ちゃんら計6人がお世話になった。お弁当まで頂き、本当にありがたかった」

翌12日朝、動き出した京急線で家に帰り、13日には夫の郷里、広島県の実家に避難した。

(有吉由香)